

相互添削を取り入れた作文授業の設計と実践

The Design and Practice of Writing Class Incorporating Mutual Correction

北村 雅則, 山口 昌也

Masanori KITAMURA*1, Masaya YAMAGUCHI*2

*1 名古屋学院大学, *2 国立国語研究所

*1 Nagoya Gakuin University, *2 National Institute for Japanese Language and Linguistics

<あらまし> 本論文では、初年次教育として行う文章表現法の授業において学習者同士による相互添削を行った結果を報告する。相互添削は学習者の自発的な学習を促し教育効果が見込める一方で、実現が困難であるという問題を抱える。この問題を回避すべく、授業には作文支援システムTEachOtherSを用いることを前提とし、作文支援システムの利点である学習者が習得すべきポイントを自覚化させることを活かしながら相互添削を指向した授業デザインを行った。課題全体を通して(1)作文、(2)学習者によるマークアップ、(3)システムによる問題点の指摘、(4)学習者同士の相互添削という学習活動を行うことで、学習者の自発的かつ相互的な学習を促し、文章の質的向上も見られた。

<キーワード> 教材開発, 授業実践, 教育ソフトウェア開発, 大学教育, 授業研究

1. 発端

多くの大学では初年次教育として文章表現法など文章力強化を謳う授業を開講しているが、授業をするにあたり問題も多く存在する。本論文で問題とするのは以下の3点である。

1. 文章表現に関する学習者の状況把握
2. 学習者が受身にならない授業内容の模索
3. 文章作成に関する効果的な指導法の確立

こうした問題に対し、以下のようなねらいのもと授業デザインを行った。

- A) 事前アンケートにより学習者の状況を把握する。
- B) 与しやすい課題を設定する。
- C) 学習者の作文をあらかじめ教師が添削しておき、その結果をフィードバックする。
- D) 学習者同士が相互に添削をすることで自身の作文力を高める。

本論文では、こうした目論みのもと行った授業実践を報告する。

2. 授業の実践

授業をどのように実践したのかを次に示す¹。

➤ 環境

- ・対象：大学1年生, 20~30名×3クラス

¹ 具体的な課題内容については、次のURLを参照のこと。<http://www.teachothers.org/>

- ・目標：分かりやすく説明する方法を学ぶ。
 - ・課題1：国旗の模様を説明する。
 - ・課題2：類似する国旗の共通点と相違点を説明する。

➤ 学習活動

- ・課題1
 - ・作文（「オランダ国旗を説明する」）
 - ・作文をふまえたフィードバック。必須記述項目の解説。実践演習
- ・課題2：
 - ・文章構造と必須記述項目の確認。
 - ・作文（実践演習）
 - ・相互添削

3. 学習者の状況把握

3.1 事前アンケート

学習者の状況やニーズをつかむため、事前アンケートを行った。結果の一部を以下に挙げる。

- イ) 小中高で文章の書き方を習ったことがある。→「はい」71.8%
- ロ) 「大学で課されるレポートをどのように書けばよいか」→「分からない」61.5%

この結果から高校までになんらかの作文指導を受けたものの、学習が十分ではないまま大学に進学してきたことがうかがわれる。

3. 2 初発の作文

課題1「オランダ国旗を説明する」では、内容として1.説明の対象,2.国旗の形,3.国旗の模様・柄,4.色の種類,5.色の配列の5項目(必須記述項目)が書かれていなければならず,かつ,そのためには40字以上の字数を必要とするという6つの条件を設定した。こうした条件について何も説明を与えず作文を書かせたところ,平均字数48.2文字,平均エラー数2.65箇所という結果となった。学習者は,課題に対してどのような説明や内容が求められるのかということ意識せずに作文を書くようである。

4. システムによる支援

学習者は,作文支援システムを使用して作文を書く際,自分の作文に対して,必須記述項目や文章構造のマークアップをする。これは文章を作成する際に必要な事柄を自覚させるためである。マークアップの結果をシステムがチェックすることで,学習者が習得できていないことを自分で把握することができ,また,教師にとっても学習者の習得状況を容易に把握することが可能となる。

3.2で述べた初発の作文に対し,「コロンビア国旗を説明する」という課題を課したところ,平均エラー数が0.29箇所となり,マークアップによる自覚化の効果が確認できた。

5. 相互添削

作文支援システムは文章の体裁や口語表現や文体など基本的な語彙レベルの問題に対してエラーを発することができるが,記述内容など意味に関わる部分に関しては対応できない。

一般に作文の添削とは誤りの指摘や言い換えを提案することであり,指導という意味合いを込めて教師が行うことが多い。しかし,作文の添削にかかる教師の負担は相当なものである。また,添削が学習者に対して十分に伝わり,教育効果を生むのかという問題もはらむ(塚本(2007))。

我々は,学習者の受身の学習を改善し,一層の教育効果を生み出すという目的の下,学習者による相互添削の試みを始めている²。今回の相互添削では,1.誤字・脱字,2.口語表現,3.語彙・接続表現,4.説明不足,5.冗長,6.その他の6つの

観点から行うこととした。

課題2の作文終了後,相互添削開始前に教師による事前添削を試みた³。その結果1作文当たりの添削箇所は平均5.0箇所であった。今回の相互添削では,添削促進のためのシステム支援を組み込んだが(山口(2010)),1作文当たりの添削付与数は平均3.5箇所となった。特にシステムには指摘できない「4.説明不足」や「5.冗長」の指摘が,前者は添削全体の20.9%,後者は9.8%を占めた。添削内容を精査する必要はあるが,他の学習者の作文を添削することで内容や表現上の不備に気づき,さらには,自身の作文に対する指摘を受けて修正することにより,教師からの一方的なフィードバック以上の効果を生むと考えられる。

6. 終わりに

以上,作文支援システムを使用した文章表現教育の実践を報告した。紙幅の都合により,相互添削の効果の一端しか示すことができなかったが,有効性の一部は示すことはできたと考える。

謝辞 本研究は,科学研究費補助金基盤研究(C)「学習者の自発的学習と柔軟な運用を考慮した作文支援システムの実現」(課題番号20500822)の支援を受けた。

参考文献

- 北村雅則,加藤良徳,棚橋尚子,山口昌也(2010) 学習者同士の相互添削にみる作文支援システムの教育効果. 言語処理学会第16回年次大会予稿集
- 棚橋尚子(2010)大学初年次教育における作文支援システムの導入と効果. 第118回全国大学国語教育学会東京大会予稿集
- 塚本真也(2007)日本語力の徹底訓練による教育法. 日本語コミュニケーション教育ハンドアウト
- 山口昌也,北村雅則(2010)相互教授型作文支援システムにおける相互添削促進手法の実現. 日本教育工学会第26回全国大会講演論文集

² 北村(2010),棚橋(2010)など。

³ 誤りの箇所をマークアップするのみで修正はしない。